

講演

## すべてのこどもにこども時間を！クリニックラウンの軌跡

日本クリニックラウン協会事務局長兼アーティスティックディレクター  
塚原 成幸



協会発足5周年を記念したフォーラムを開催できることを心より感謝しております。私が担当する講演のタイトルは「すべてのこどもにこども時間を！クリニックラウンの軌跡」です。クリニックラウン（臨床道化師）の活動が始まってから5年間、どんな出来事があったのか、そもそもクリニックラウンとは一体何者なのかをもう一度原点に戻ってお伝えしていきたいと思えます。

最初にクリニックラウンが最も大切にしている考え方を紹介しましょう。私たちはどのような状況下であっても「中心はこどもである」という考え方を中心に据えています。協会の活動を進めて行く時には、いつもこの考え方に照らし合わせて物事を決定していきます。「これは、子どもにとって本当に必要なのか」「大人の事情なんじゃないか」というような矛盾をちゃんと見極めてから行動するという意味です。ですから、「中心はこども」という考え方は、日本クリニックラウン協会の行動指針の原点です。

### クリニックラウンの焦点

Focuspoint: the child  
中心はこども

To improve the well-being of sick children by the use of clowning

☛クラウニング（豊かなコミュニケーション）を用いて病気のこどもたちの幸せに貢献する。

クリニックラウンは、豊かなコミュニケーションを用いて病気のこどもの幸せに貢献していくという使命を持っています。クリニックラウンは医療者ではあ

りませんから、医療技術を駆使するとか、医療行為を行う訳ではありません。しかし、豊かなコミュニケーションを用いて子ども達の生活をより豊かなものにしたいというビジョンを持って医療施設を訪問しています。

### クリニックラウンとは何か？

Clinic + Clown = CliniClowns

↓

## 臨床道化師

入院生活をおくるこどもの病棟を定期的に訪問し、遊びとユーモアを届け、こどもたちの笑顔を育む道化師のこと。

【クリニックラウン】とは、病院をさす[Clinic]、と道化師の[Clown]を合わせた造語です。ちなみに、日本では某自動車メーカーの[クラウン]の方が有名ですが、実は道化師の事も[クラウン]と昔から言います。少し話がそれますが、車のクラウンは、[Crown]と表記します。ですから、LのところはRになりますと、王様の王冠になるわけです。逆にLになりますと、赤鼻を付けた道化師になります。病院と道化師を合わせて「クリニックラウン」と呼びます。本日、この会場にいらしたみなさんには、「クリニックラウン＝臨床道化師」というキーワードは覚えてもらいたいと思います。

クリニックラウンは、入院生活を送る子どもの病棟を定期的に訪問し、遊びとユーモアを届け、子どもの笑顔を育む道化師です。ポイントになるのは、子どもの病棟を定期的に訪問するということです。訪問は2週間に1回であったり、月に1回だったり、つまり約束された病院を必ず訪問するのです。しっかり約束を果たす存在であるということが、クリニックラウンの特徴の1つです。

ちなみに、定期的に病院を訪問すると、どんな反応があると思いますか？中には、「さぞかし喜ぶでしょう」という意見を持つ人もいるでしょうが、現実には必ずしもそうとは言えません。実際にクリニックラウンが定期訪問をすると、多くの子ども達からこのような反応が返ってきます。クリニックラウンと子どもが出会うと、「他に行くところないの？」と子どもからかなり辛辣な態度で迎えられたりします。あるいは

まじまじと見て、「あんたらヒマだねー」と言ってくる子どももいます。でも、こういう時こそ、なぜ子どもがこのようなことを言うのかをしっかりと受け止めながら考える必要があると思います。大人に対して手厳しい事を言う子どもをよく見ると、その子自身が様々な困難を抱えている場合が多々あります。そのため、「この人はちょっとした興味で来ているのか?」とか、「本音で関わろうとしているのか?」とか、「同情心で向き合おうとしているのか?」といった本質を子どもなりに見極める尺度が、厳しい発言の源だと思えます。

臨床現場で、様々な活動をされている方には共感してもらえと思いますが、厳しい言動を繰り返す人は、決して援助する人間に対してダメージを与えたいという意図があるのではなく、本当は感情の深い所で人間と繋がっていたいという思いで、他者に辛くあたってしまうのではないかと思います。ですから、私たちクリニックラウンは、「もう来ないで」といった拒絶や、「嫌だ」というような気持ちが前面に出る子どもほど、この子どもは、「丁寧に人間関係を求めている」というように解釈して関わる機会を持つようにしています。

例えば、先ほどのように、「他に行く所はないの?」と言われたら、「他は考えた事がないよ。だって僕は病気に関心がある訳でも、病院に興味がある訳でもなくて、〇〇さんに会いたいから、今日は来たんだよ」と伝えたいと思います。実際にこう子どもに言うと、結構呆然とする場合があります。病室にいと、扉の向こうから来る人はみんな、「体調はどう?」とか「お腹は痛くない?」など病気や体調の事しか聞かないのに、そうじゃない大人もいることに驚くようです。これは、自分そのものに関心を持つ人がいることに新鮮さを覚えるということです。そして、さっきまで厳しい言動だった子どもが、「じゃあ、ちょっとここに座る?」とか、「遊んでいく?」といった具合に穏やかな表情になることもあるのです。

クリニックラウンは優れた表現者であると同時に、こどもとの接し方、こどもの心理、保健衛生、ファミリーサポートや病院規則に通じたスペシャリストです。

豊かなコミュニケーションと愉快な遊びを通じて、こどもの幸せに貢献します!



私たちクリニックラウンの専門性としては、まず、真摯な姿勢で個と向き合う、個人としっかり対話をするという事を何よりも大切にしています。この活動は笑いをとることを主な目的にしていると誤解をさ

れることがあります。病院を遊園地のように楽しい場所に変えようと思って、クリニックラウンは病院を訪問している訳ではありません。入院している子ども達が、笑顔になれる環境づくりに取り組むこと、それが私たちクリニックラウンの役目なのです。

クリニックラウンは優れた表現者であると同時に、子どもとの接し方や子どもの心理、保健衛生、ファミリーサポート、そして病院の規則に精通した専門家でなければなりません。例えば、子どもとの遊びの延長でキャッチボールが始まって、手元がすべて床にボールが落ちてしまったとします。すぐにボールを拾って、子どもの手元にボールを戻すようなことをしたら、クリニックラウンの認定試験では即、不合格です。一般の子育ての場面ではOKであっても、病棟の中ではNOなことはたくさんあるのです。病棟の床の衛生管理をどのように考えるか、これは入院中の子どもの身を守る大事な視点なのです。ですから、どんな配慮が必要なのかを、常に考慮し、トレーニングしていく必要があります。

子どもが中心の活動なのに、なぜファミリーサポートの視点が必要なのかと思う方もいるかもしれません(左下スライド参照)。クリニックラウンの活動をお話すると、多くの方が「子どもが笑顔になる素敵な活動ですね」と声をかけてくれます。しかし、関わってきた子どもが、旅立っていく、亡くなっていくという現実もあるのです。ですから、限りある子どもの命をどのように見つめていくのかということも、私達クリニックラウンにとっては目をそむけることができないことです。また、ターミナルケアを受けている子どもとの関わりでは、子どもとクリニックラウンが遊んだその時の光景が、家族にとっては最期の子どものいきいきとした記憶になることもあります。最近、子どもらしい表情を見なかったけれど、子どもがクリニックラウンと遊ぶ姿を見ることによって、久しぶりにその子らしい表情や反応を見ることが出来た。こういった記憶はかけがえのないものだと思います。だからこそ子どもと関わる時は、それと同じ位、家族の気持ちに配慮することが求められるのです。言葉だけでクリニックラウンの養成について伝えるのは難しいのですが、対人援助者として様々なことを総合的に学んで、クリニックラウンになるのです。

活動の主役はこども

こどもの成長・発達に欠かせない3大要素

- 想像力を刺激する 「遊び」
- 能動性や自主性を育む 「新鮮な出会いと発見!」
- 家族や友達、学校など「社会的環境」

クリニックラウンとかかわることで、こども自身が人との関わりを積極的に楽しむようになり、こどものQOL向上が期待できます。



クリニックラウンの活動の主演はあくまで子どもです。わかりやすく言えば、クリニックラウンは派手な格好はしていますが、黒子の役目を担っていると思っています。ただだけたらわかりやすいと思います。私達は医療者ではありません。ですから、医療行為に関しては基本的にはノータッチです。そうお話をすると、医療現場で医療行為を行わなかったら、無意味な存在だと思う人も中にはいるかもしれません。確かに、医療現場にいて全く医療行為を行わないということは、100%無力であると思われるのも仕方ないと思います。しかし、無力が故にそれが絶対的安心感となって、心の安定に発展することもたくさんあります。私達は医学的には無力です。しかしそれは、痛い事を100%しない存在であるということでもあります。言い換えれば何も出来ない立場だからこそ、瞬時に子ども達は「この人は何も出来ないんだ」「でも痛い事もしないなあ」と思ってくれます。そして、安心して素直な気持ちを表してくれます。自分より力のある相手にはなかなか本音を言えないことはよくあることです。子どもは入院生活の中で、大人にたくさん気を遣っています。もし、「来ないで」なんて言ったりして、嫌われたらどうしようとか、見放されたらどうしようとか心配になる子どもはたくさんいます。でも一見頼りないクリニックラウンには、自分が思っている素直な気持ちを気軽にぶつけることができるのです。そこが、逆転の発想に基づく、私たち道化師の強みなのです。

このように無力さを発想の転換で強みに変えているクリニックラウンですが、独特の専門領域が存在します。それが、子どもの成長、発達を促進させる『発達援助職』であるということです。この役割には誇りを持って取り組んでいます。また、私達は子どもの成長、発達に欠かせない『3大要素』を重視し、これを実現させるために病院を訪問しています。まず1つ目は、想像力が刺激される遊びの創造です。遊びと言っても、ゲームソフトやゲーム盤を持ち込むことではありません。皆さんも子どもの時に楽しかった遊びを思い出してもらえば分かるように、子ども同士の関係性の中で、ごく普通に自然に生まれるような遊びが大事なのです。例えば、カーテンがあったら「隠れてみようかな」とか、「突然、飛び出して驚かせてみようかな」とか、いくらでもアイデアはあると思います。古臭いと思う人もいますが、「いないいないばあ」だっていいのです。2つ目は、能動性や自主性を育む、新鮮な出会いと発見です。今日の小児医療現場に目を向けてみますと、様々な工夫や実践が行われています。設備面などは、ここ数年で劇的に変化していますが、問題点が無くなった訳では勿論ありません。むしろ、いろいろな取り組みが進むことにより、課題がより鮮明になってきた部分もあると思います。それが、人間的なつながりの回復だと私は思っています。

人と人との出会いの中で、「また、会おうね！」とか「また、来たよ！」といったコミュニケーションを充実させることが今、改めて求められています。「季節が変わっていったなあ」とか、「もうすぐクリスマスが来るね」というような何気ないやり取りの中でもいろいろな発見があるわけです。3つ目は、家族や友達、学校などの社会的な環境です。もう一度繰り返すと、『遊び』と『出会い』と『環境』、この3つのテーマを多層的にサポートしていくのが私達クリニックラウンの専門性です。ですから、先程お伝えしたように「私たちは無力である」と言っても、実は取り組むべき事が山のようにあるのです。

次に、クリニックラウンが目指している到達点を紹介したいと思います。それは、『クリニックラウンと子どもが関わる事で子ども自身が人間との関わり合いを楽しめるようになる事』です。よりストレートに言い換えると『人を好きになってもらう』ということです。長い闘病生活の中で、自分自身に希望を持ってなくなっている子どもも多く出会います。あるいは自分があるばかりに家族に迷惑をかけていると思ひ込み、自己嫌悪になってしまう子どももいます。自分のせいでみんなが大変な思いをしていると思えば、どうしても自分自身に向けられるべき自己愛は減少します。自分に対する愛情が低下すれば、おのずと闘病に対してのモチベーションが低下しがちです。入院している子どもと将来の話をする、「将来？今が辛いのに、先の事なんて考えられないよ」と語ってくれることもあります。だからこそ今の自分をきちんと受容出来ること、そして愛情を自分に向けられるようになることが何よりも大切なことだと思います。クリニックラウンは心を通わせたコミュニケーションを図りながら、まずは関わりを深め、そして自分自身を含めた人間を好きになってもらいたいというつもっています。そして、こういったことが現実的なものとなった時に、子ども版のQOL(クオリティ・オブ・ライフ)が保障されるのだと感じています。



日本クリニックラウン協会がクリニックラウンを募集する時に求めている基本資質は「子どもよりもこどもらしい...スーパー子ども性」を備えた人です。〈スーパー子ども〉と聞くだけではなかなかイメージがわ

きにくいのでエピソードを紹介してみたいと思います。例えば、クリニックラウンが病棟に入ろうとすると、困ったことが発生します。すぐには病棟に入れないのです。子どもに会いに行っているのに、入口でまごついたら時間のロスと思う方もいるかもしれませんが、この瞬間から「スーパー子ども」は始まっているのです。1週間前に行った病院であったとしても、「スーパー子ども」には病棟に入る為に必要な4ケタの暗証番号なんて覚えることは至難の技です。つまり、大人社会のルールを履行するのが苦手なのが「スーパー子ども」というわけです。中に入りたけれど「入れないよお」ってやっていると、今皆さんほぼ一斉に「わざとらしいなあ」と思ったと思います。本当に一生懸命「みんなに会いたくて来たのに入れないよお」と訴えかけると、子どもはちゃんと対応してくれます。病棟にいる子どもはそんなクリニックラウンを発見すると、すぐに、ベッドから自力で降りて助けに来てくれます。「もうしょうがないな」って顔はしますが、病棟の中に招き入れてくれるのです。

この場面では、どのような子どもの気持ちが反映されていると思いますか？昨日入院したばかりの子どもは状況が分からずキョロキョロしていますが、長期入院をしている子どもはすぐに反応し、クリニックラウンを助けてくれます。長期入院の子どもほど助けられる人の気持ち、ケアを受ける側の心情が分かっているのではないのでしょうか？子どもなりに他者から助けられている実感があるので、「チャンスがあれば誰かを助けたいなあ」という気持ちが芽生えているのだと思います。このように、子どもの声なき声をきちんと受け取れるかがとても重要なことです。

また、訪問の中で感じるのは、困難な状況に直面している子どもほど相手の気持ちをつかむことができるということです。助けられたという感謝が思いやりの心を育むのかもしれない。こんな時は、「いいよ、自分で出来るから」なんて言わず、どんどん子どもたちに甘えるようにしています。

話を戻しますが、子ども達のおかげでドアが開いたとします。すると今度は、気持ちが一気に高まって、嬉しさのあまりハーモニカなんかを吹きながら「来たよお」なんて盛り上がったりします。すると、日本中どここの病院に行っても申し合わせたようにこう言われます。「静かにして！」こう言われた時は、こちらが落ち込んだりすると、子どもがあんな事言わなきゃよかったと思うかもしれませんが、こんな時にはちょっとしたユーモアが必要です。たとえば「静かにして！」と言われたら「今、しずかって言った？しずかってさあ、もしかして、のび太の友達？」なんて言ったりします。子どもには「それアニメでしょ。そうじゃなくて、ここは病院だから静かにするの！」と言われたりします。そんな時は、「了解！病院に

行ったら静かにするね」なんて答えますが、すると「ここが病院でしょ！」と子どもの指摘が待っているわけです。でも「ここが病院でしょ！」と言う子どものエネルギーの高さを見て、担当の看護師さんや母親がビックリすることがよくあります。「いつも内気な子がクリニックラウンに注意している」と感心されるのです。つまり、このように身近な存在の人や、子どもの周辺にいる大人の一人ひとりの子どもに対する視線をチェンジさせることが「スーパー子ども」の最大の効果です。身近にいる関係だからこそ、つつい『この子は、こういう存在』と思い込んでしまうことはよくあることです。ですから、クリニックラウンは赤い鼻はつけますが、自分の色眼鏡は外して、まっさらな新鮮な状態で子どもと向き合うようにしています。また、そうすることで子どもの真意を代弁することが可能となるのです。

そして、「スーパー子ども」の効果は大人へのアプローチでも発揮されます。以前訪問した病院でのエピソードですが、当時7歳の男の子が入院をしていました。その子は、目が合っただけでも、すぐに顔をそむけてしまう子どもでした。実はこのような反応を返す子どもは現実的には非常に多いのです。ですからクリニックラウンにとって、このような子どもからの「NO」という反応があった時に、どう対処するかも重要になってきます。イヤか、イヤじゃないかを言葉で同意をとればいいというのは大人社会のルールです。ですから、子どもと接する時は、やはり言葉にならない思いをどのように汲み取るかが大切だと思います。言葉にならなくても、否定や拒否、あるいは歓迎の気持ちが指先のほんの微かな動きに表れるかもしれません。それは、足の向きに出るかもしれないし、声のトーンが変わるかもしれないし、視線の強さに表れるかもしれません。脈拍、血圧、体温といったバイタルサイン(生命兆候)以外にも相手を知る手立ては必ずあるはず。好き、嫌いだったり、快、不快であったり、その人の感性を手がかりに相手を理解することが求められます。

先ほどの7歳の子の場合は、明らかに目が合った瞬間から強い抵抗がありました。初対面でしたらその気持ちも分かりますが、この子の場合は、数ヶ月経ってもその状態が続き、エスカレートする一方で、約半年近くこの関係性が続いていました。今日お集まりの皆さんの中には対人援助の仕事をしている方もいると思うのですが、こういう時は援助者も辛いですね。しかし、このような時こそ、援助者の底力が試されているのだと思います。この場面で大切なのは、その人の気持ちをいかに丁寧に受け取れるかです。ちゃんと「嫌だ！」と言えた事は、ある意味ではコミュニケーションがきちんと成立したことであり、完全なる否定ではないの

です。たとえそれが援助者にとって歓迎すべき反応ではなかったとしても、こうして自分の判断を相手に伝えることができたことは、その子の成長・発達の過程においては重要な意味を持っているわけです。だからこういう時、クリニックラウンはしっかりと子どもの感情を受け取って、次の訪問に繋げていきます。大事なのは、「本当は関わりたいけれど、今はそういう気持ちじゃないのなら、また次にするね」という気持ちの余裕だと思います。そして、「もし気が向いたら次は遊ぼうね」という働きかけが大切です。そして、これは相手が新生児であっても必要な配慮だと思います。言葉が通じないから語りかけないというのでは、いつまでたってもお互いの距離は変わりません。相手から拒否されたり、「嫌だ」と言われたりした時こそ、粘り強く関わることができる必要があります。こちらが無理だと思ったら、その瞬間に関われなくなるのです。

先ほどの7歳の子の場合は、半年ほど時間が経過した頃にある変化が起きました。例えるなら、心の雪解けが訪れたのです。その日は、彼の視線が外されることがなく、こちらをしっかりと見てください。思わず目が合っちゃった感じだと思いますが、私は嬉しかったです。やっと待ちに待った日が来たと思って、嬉しそうに近づいたその時、白衣を来たとある方が入ってきました。しかも、もの凄い足音を立てて突然ベットのサイドに登場したのです。その人は、入ってくるなりクリニックラウンを指して「面白いでしょ？」と子どもに言いました。次の瞬間、ほんの少しクリニックラウンに興味を持ち始めていたその子は、一気にガチガチに固まってしまいました。しかし、こういう時こそ<スーパー子ども>が役に立つのです。普段なら、主治医の先生が入室したら私たち大人は、「いつもお世話になっています」と挨拶しますよね。しかし、<スーパー子ども>の立場でこの状況を見ると、子どもにとって、先生は固いイメージであり、2人の距離感もかなり開いていて、こんな状況が繰り返されたら、病院のことも先生のことも苦手になるだろうと判断するわけです。クリニックラウンとしては、このような時こそ、発想力を充分発揮して有効な関わりをつくる必要があります。その時、私がとった行動は、パッと廊下を見て、廊下にあった清掃用のホウキを手に入れました。そして、先生の目の前に置いたわけです。先生にしたら、これは試練の瞬間です。でもさすが日ごろから子どもと関わっている小児科の先生だと思いました。その先生のユーモア精神は見事でした。覚悟を決めてホウキをぐっと握って2、3回こう掃く真似をして、「また後で来ます」って言ってくれた

のです。それを見た子どもは、ベッドの上でトランポリンのように跳ねて喜んで、誰もが見たことがないような笑顔になりました。その出来事を境に、クリニックラウンとその子の関係もでき、毎回楽しく遊ばせてもらうようになりました。こういうことも、<スーパー子ども>だからこそできる実践だと思います。ところが、この話はこれで終わりではなくて、後日談があります。ちょうど2週間経った時、先ほどの先生と病棟の廊下でばったり会いました。すると、その先生が、少しニヤッと笑って手招きをしたのです。私の気持ちとしては、例のやりとりがあるので、気が進まない部分もありましたが、ナースステーションで先生と話をすることになりました。柱の奥でクリニックラウンと、白衣のドクターが話をしているだけで、コミカルな感じですが、その時はお互い真剣でした。先生は開口一番、「例のホウキ事件の一件ですが」と言うのです。私はこの時初めて、あれは事件だったのだと気付きました。私にしてみるとあれはユーモアの範疇だったのに、先生にとっては事件だったわけです。つまり、ユーモアというものは、どの場面で、どのように活用するかが大事だということです。活用の仕方です。トラブルを引き起こすし、人間関係を悪化させることもあるのです。その先生の話では、「あの事件の後、子どもが目を見て話してくれるようになった」とおっしゃるのです。実は、主治医の先生は8ヶ月前からこの子を担当していたらしいのですが、クリニックラウンに対しても緊張してしまうくらいですから、先生が「おはよう！」と部屋に来るだけで、極度に緊張してしまって、薬の話も治療計画も全く話ができなかったと言うのです。つまり、先生自体も、どう関わっていいのか悩んでいたそうです。そこにクリニックラウンが現れて、子どもと楽しそうにやっているので、今がチャンス！とばかりに入室したのに、ホウキを持たされたので、正直、先生はがっかりしたそうです。しかし、ホウキ事件があった日の夕方から、いつもだったら目が合うだけで固まっていたその子どもが、目が合った瞬間に「フツ」と鼻で笑うようになったというのです。そして、鼻で笑った後は、顔をまじまじと見て、「何の用？」って言うようになってきたそうです。このように、一生懸命関わっていても、その思いが子どもにどう伝わっているのか、丁寧に振り返る必要があると思います。8ヶ月間の関わりの中で、「初めて子どもの興味が先生に向いた瞬間」、それがホウキ事件の本質です。興味が持てない中で、いくら周りが「こうしようよ」とか「頑張ろうよ」と言っても本人の気持ちがついてくるとは言えません。この事例からも分かるようにクリニックラウンというのは、時と

して溝が出来てしまう人間関係をいかに再構築することが出来るかが問われています。『人と人を繋ぐ架け橋になる』それが、私たちの究極な専門分野と言えらると思います。確かな人間関係の構築こそ、一人ひとりの生きる力を育むことにつながると考えています。また、関係性がしっかり整うことで、豊かなコミュニケーションが生まれ、やがて自然な笑顔になれるものです。出会ってすぐに笑わせようというのは、ある意味とても危険なことでもあります。「笑ってごらん」と言われても、やはりそういう気持ちになれない日もありますし、特に困難な状況にある時は、笑うことを押し付けることはできません。笑うことを強引に押しつけるのではなく、大切なのは、人間関係を丁寧に育んでいくことであり、生きている実感を高めることなのです。また、そのお手伝いをするのがクリニックラウンだと思います。



クリニックラウンは、いろいろな工夫を凝らして病棟を訪問しています。クリニックラウンは現在、一般病棟だけでなく、NICUや、PICU、GCUといった集中治療のユニットにも訪問しています。

例えば、集中治療室にスライドのようなサーカスタイプのメイクの道化師が来たら、子どもたちや家族はどう思うでしょうか？自分の子どもが集中治療を受けている時に、あの扮装で道化師が陽気に登場したら、とても受け入れる気持ちにはなれませんよね。ですから、クリニックラウンは人間味あふれる自然な表情を優先させるようにしています。また、クリニックラウンは人を好きになってもらう為の初期段階を担っているので、メイクなどは施さず、あくまで共に泣き、共に笑えるような表情を大切にしています。

また、病棟を訪れるために、衛生面の配慮も欠かせません。たとえば消毒液の扱いですが、病院にはポンプ式の消毒液があります。部屋に入ろうと思った時に、入室前に「消毒しなくちゃ」と思って無表情に手を消毒して、その後、笑顔で部屋に入ったとしても対応としてはバツです。なぜかという

大人ならどんな場合でも感染予防の為に消毒が必要という意味がクリアにわかります。しかし、子どもの場合は、窓越しに見える入室する前の表情や訪問者の息づかいなどから、「この人は自分に対してどう思っているのかな？」と察したり、あるいは「痛い事をするのかなあ」といった具合に、いろいろなことを心配するわけです。ですから、一口に消毒と言っても、行動1つで相手に与える印象がどのようなものであるかを想像する力が問われます。私たちは、こういった日常的な動作である消毒行為に対してどう活用していくか、日々研究を続けています。



クリニックラウンは病棟を訪問する時にマスク着用ということもよくあります。ですから、マスクをどのように着用したら、子どもの印象が悪くならないかなども検討を繰り返すようにしています。口元の表情は相手の印象を決定付ける重要な意味があります。人間は口から言語を発し、他者とのコミュニケーションを取ることが多いのですが、クリニックラウンはマスクをつけた状態でも、自然にコミュニケーションを取る方法などをいつもトレーニングしています。

本日お集まりの方の中には、クリニックラウンが定期訪問している病院のスタッフの方もいますが、初対面の子どもが拒絶したり、泣く子どもが少ないことを記憶されている方もいると思います。でもそれはたまたま幸運だったわけではなく、実践の中で蓄積された臨床の知の結果でもあるのです。例えば距離感であるとか、スピード感とか、目線の高さとか、熱量だとか、たくさんの快・不快を瞬時に判断して、子どもとの信頼感が養われるのです。

では、次にクリニックラウンが訪問することでスタッフが変化を感じた点について、医療現場の声を報告します。

「子ども達がいきいきとしている」、「子ども同士の結束力がアップした」という子どもに対する印象の変化、あるいは、「クリニックラウンが来る前に検査や治療を終わらせておいてほしい」というような子ども

の自発性の促進に対する意見、「病棟全体が明るく、風通しが良くなってスタッフの笑顔が増えた」というような感想が多数意見です。

**医療者がクリニックラウンに期待していること**

- 入院によるストレスの軽減や、不安感の解消。
- 遊びを通じての成長・発達の援助ができる。
- 精神的なゆとりを家族に提供できること。
- 病気のことを忘れられる時間の提供が可能となること。
- スタッフの苦手な部分に介入してもらうことができること。



今後、医療者がクリニックラウンに期待している事としては、「入院生活によるストレスの軽減や、不安感の解消」だったり、「成長発達の支援の援助」、「家族にゆとりを提供」が出来たらいい、「病気の事を忘れられる時間の提供」に期待するという意見もあります。

**今なぜ「すべてのこどもにこども時間」が必要なのか？ スローガンの変化**

協会発足時(2005年)  
 「入院中のこどもに笑顔を」  
 ↓  
 臨床現場で子どもと関わることによって…  
 ↓  
 子どもの闘病生活には笑顔になることだけが重要なのではなく、笑顔になるための療育環境の充実が欠かせないことに気がついた！！  
 ↓  
 子どもの成長・発達には様々な新鮮な体験や、心の通った人間的な交流が欠かせない。  
 ↓  
 「すべてのこどもにこども時間を！」(2007年～)



最後に、日本クリニックラウン協会では、「すべてのこどもにこども時間を」というようなスローガンを掲げて活動を展開していますが、協会発足当時(2005年)から掲げていたわけではありません。今から5年前の2005年当時は、「入院中のこどもに笑顔を」というようなスローガンでした。しかし、実際に入院生活を送る子どもと日々関わるようになって改めて気づかされたのは、子どもの入院生活に必要なのは、笑顔になる事だけではないということでした。厳しい世相の中でも、せめて子どもだけには笑っていてほしいというのは、もしかすると大人側の願望なのではないかと思うようになり、私はとても反省しました。笑顔の前に、現代を生きる子どもには、子どもらしさを保てる「こども時間」が不足しているのではないかと思ったのです。つまり、一人ひとりの成長や発達に合わせた生活の質、社会参加の方法などを保障することが最も重要だと考えるよう

になりました。確かに人が前向きな生き方をしていく上で笑顔であることは大切です。しかし、周りから笑顔、笑顔と期待されればされるほど、笑顔になることが逆に過度なプレッシャーになることも忘れてはいけないと思っています。そんな思いを込めて、「すべてのこどもにこども時間を」という理念は生まれました。

また、「こども時間」を保障するためには何よりも、安心して人間関係を育める、療育環境の充実も欠くことができない課題の一つです。人間は、心の通ったふれあいを保つことによって、おのずと笑顔になれるものです。だからこそ、笑顔になることを急がせてはいけないと思います。一人ひとりのペースに合わせて笑ったり、泣いたりできることが忙しい現代の生活には求められていると思います。

「すべてのこどもにこども時間を」という事をタイトルに据えて、クリニックラウンの概略説明をさせていただきました。訪問先の様子但至少でも伝われば大変光栄です。この後、現場で実践しているクリニックラウンの3名による事例報告がありますので、今お話した概要説明がより具体的に分かっていただけるのではないかと思います。では、事例報告の発表者にマイクを譲りたいと思います。今日はありがとうございました。

## ●日本クリニックラウン協会5年のあゆみ

- 2004年  
 1月 オランダ総領事館主催「クリニックラウンワークショップ&講演会」開催  
 12月 クリニックラウン協会設立準備委員会発足
- 2005年  
 5月 日本クリニックラウン協会発足、事務所開設  
 7月 第1回クリニックラウン公開オーディション開催(以降順次開催)  
 第1期クリニックラウン養成の実施(以降順次開催)  
 10月 特定非営利活動法人 日本クリニックラウン協会として法人認証をうける(10月19日)  
 11月 クリニックラウンの定期訪問開始(大阪府の病院への派遣が開始)  
 12月 兵庫県の病院への派遣が開始
- 2006年  
 3月 第1回クリニックラウン認定試験の実施(以降順次開催)  
 5月 関東での派遣開始(東京都の病院への派遣が開始)  
 「クリニックラウンの日(9月2日)」が日本記念日協会より認定される(5月5日制定)  
 9月 クリニックラウンフェスティバルの実施(9/2)以降毎年開催する
- 2007年  
 4月 京都府の病院への派遣開始  
 8月 茨城県の病院への派遣開始  
 9月 インターネットクリニックラウン for children 事業開始
- 2008年  
 1月 千葉県の病院への派遣開始  
 4月 静岡県の病院への派遣開始  
 6月 岡山県の病院への派遣開始  
 8月 臨床道化師フォーラム2008開催(8/31)
- 2009年  
 2月 クリニックラウンオランダ財団理事長、アーティストリーダー来日(2/8~2/14)  
 5月 香川県の病院への派遣開始  
 RED NOSE JAPANPROJECT 実行委員会を協会内に立ち上げる。  
 8月 「RED NOSE DAY~1万人の笑顔大作戦~」(8/7)チャリティイベントを実施  
 臨床道化師フォーラム2009開催(8/23)
- 2010年  
 8月 「RED NOSE DAY~1万人の笑顔大作戦~」(8/7)チャリティイベントを実施  
 10月 臨床道化師フォーラム2010開催(10/17)  
 写真展「瞬間を生きるこどもたち」開催  
 「こども時間」を届ける臨床道化師」出版